



弁成の立に、我が身叶ひ難きが故に且く聖道の行を捨閉し閣抛し淨土に歸し、淨土に往生して法華を聞いて無生を悟ることを得べきなり。日蓮難じて日く、我が身叶ひ難ければ穢土に於て法華經等・教主釈尊等を捨閉し閣抛し、淨土に至って之を悟るべし等云云。何れの經文に依って此くの如き義を立つるや。又天台宗の報土は分真即・究竟即、淨土宗の報土は名字即乃至究竟即等とは、何れの經論釈に出でたるや。又穢土に於ては法華經等・教主釈尊等を捨閉し閣抛し、淨土に至って法華經を悟るべしとは、何れの經文に出でたるや。

弁成の立に、余の法華等の諸行等を捨閉し閣抛して念仏を用ゆる文は、觀經に云はく「仏、阿難に告ぐ、汝好く是の語を持て。是の語を持つ者は即ち是無量寿仏の名を持つ」文。淨土に往生して法華を聞くと云ふ事は、文に云はく「觀世音・大勢至、大悲の音声を以て其れが為に広く諸法実相除滅罪法を説く、聞き已はって歡喜し時に応じて即菩提の心を発こす」文。余は繁き故に且く之を置く。

又日蓮難じて云はく、觀無量寿經は如来成道四十余年の内なり、法華經は後八箇年の説なり。如何が已説の觀經に兼ねて未説の法華經の名を載せて、捨閉閣抛の可説と為すべきや。随って「仏告阿難」等の文に至っては只弥陀念仏を勧進する文なり、未だ法華經を捨閉し閣抛することを聞かず。何に況んや無量義經に法華經を説かんが為に、先

づ四十余年の已説の經々を挙げて未顯眞実と定め了んぬ。豈未顯眞実の觀經の内に已顯眞実の法華經を挙げて捨て、乃至之を抛てと為すべきや。又云はく「久しく此の要を黙して務めて速やかに説かず」等云云。既に教主釈尊四十余年の間法華の名字を説かず、何ぞ已説の觀經の念仏に対して此の法華經を抛たんや。次ぎに「下品下生、諸法実相、除滅罪法等」云云。夫法華經已前の実相其の数一に非ず。先づ外道の内の長爪の実相、内道の内の小乘乃至爾前の四教、皆所詮の理は実相なり。何ぞ必ずしも已説の觀經に載する所の実相のみ法華經に同じと意得べきや。今度慥かなる証文を出だして法然上人の無間の苦を救はるべきか。

又弁成の立に、觀經は已説の經なりと雖も未来を面とする故に、未来の衆生は未来に有る所の經卷之を讀誦して浄土に往生すべし。既に法華等の諸經、未来流布の故に之を讀誦して往生すべきか。其の法華を捨閉閣抛し、觀經の「持無量寿仏」の文に依って、法然是くの如く行じ給ふか。觀經の「持無量寿仏」の文の上に諸善を説き、一向に無量寿仏を勧持せる故に申せしめ候。実相に於ても多く有りと云ふ難、彼は浄土の故に此の難來たるべからず。法然上人、聖道の行機堪へ難き故に未来流布の法華を捨閉閣抛す。故に是慈悲の至進なれば、此の慈悲を以て浄土に往生し、全く地獄に墮すべからざるか。日蓮難じて云はく、觀經を已説の經なり云云。已説に於ては承伏か。觀經の時未だ法華經を説かずと雖も、未来を鑑みて捨閉閣抛すべしと、法然上人は意得給ふか云云。仏未来を鑑みて、已説の經に未来の經を載せて之を制止すと云はゞ、已説の小乘經に未説の大乗經を載せて、之を制止すべきか、又已説の權大乘經に未説の実大乘經を載せて、未来流布の法華經を制止せば、何が故に仏爾前經に於て、法華の名を載せざる由、之を説きたまふや。法然上人慈悲の事。慈悲の故に法華經と教主釈尊とを抛つなりと云はゞ、所詮上に出だす所の証文は、未だ分明ならず。慥かなる証文を出だして、法然上人の極苦を救はるべきか。上の六品の諸行往生を、下三品の念仏に対して諸行を捨つ。豈法華を捨つるに非ずや等云云。觀無量寿經の上六品の諸行は、法華已前の諸行なり。設ひ下三品の念仏に対して、上六品の諸行之を抛つとも、但法華經は諸行に入らず。何ぞ之を閣かんや。又法華の意は、爾前の諸行と觀經の念仏と、共に之を捨て畢りて、如來出世の本懷を遂げ給ふなり。日蓮管見を以て、一代聖教並びに法華經の文を勸ふるに未だ之を見ず。法華經の名を挙げて、或は之を抛ち、或は其の門を閉づる等と云ふ事、若し爾らば法然上人の憑む所の弥陀本願の誓文、並びに法華經の入阿鼻獄の釈尊の誠文、如何ぞ之を免るべけんや、法然上人無間獄に墮せば、所化の弟子並びに諸檀那等共に阿鼻大城に墮ち了んぬるか。今度分明なる証文を出だして、法然上人の阿鼻の炎を消さるべし云云。

文永九年^{壬午}正月十七日

日蓮花押
弁成花押